

機関（連携先機関）名	早稲田大学
拠点のプログラム名称	アクティブ・ライフを創出するスポーツ科学
中核となる専攻等名	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー）彼末 一之 教授 外 31 名

【拠点形成の目的】

本拠点が目指すアクティブ・ライフとは心と体の健康を指すのみならず、人々が活力をもって生きることのできる地域や社会のあり方をも含むものである。健康問題は日本だけではなく世界共通のものとなりつつある。そして、その解決にはスポーツ（運動）が大きな可能性を持つと期待され、スポーツ振興はあらゆる世代に求められるものとなっている。本拠点では高い専門性と幅広いスポーツ科学の知識を兼ね備えた人材育成のために、世界（とくにアジア地域）の教育研究拠点を形成することを目的とする。その達成に向け、戦略的プロジェクトテーマとして以下の課題を設定した。

プロジェクトⅠ：IT普及社会における子どもの体力低下抑止と健全育成促進

プロジェクトⅡ：医療・介護（社会保障）負担の軽減と中高年の生きがい創出

プロジェクトⅢ：人類幸福の実現のためのトップスポーツ興隆の方策追究

本拠点では単にスポーツ科学を総花的に展開するのではない。3つの戦略的プロジェクトの有機的な連携を通して、本来アクティブな存在である人間の健全性が危ぶまれている昨今の社会的背景やその改善策について理解が進み、子どもから高齢者、要介護者からアスリートまでのあらゆる人々のアクティブ・ライフがさらに進むような新学問体系“**Sport Sciences for Active Life**”を構築することを目指す。このような観点からのスポーツ科学を身につけた人材はアクティブ・ライフ実現にむけての、研究・実践の場で大きな力となるに違いない。

【拠点形成計画及び進捗状況の概要】

運営体制 国際的拠点として**Sport Science Center for Active Life (SSCAL)**を設立し、教育研究活動の中核とした。そしてSSCALと国内では地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター、独立行政法人国立健康・栄養研究所、国立スポーツ科学センターとの提携体制を整えた。さらに教育研究の実践経験の場として各地の小学校やNPO法人Waseda Club 2000、体育各部、スポーツ医科学クリニックなどを有機的に組織した。このような内外のネットワークの中で行われる実践的なスポーツ科学の教育研究はGCOE採択後格段に進化し、海外諸大学との協力関係の確立とも相まって、アジアのこの分野の中核として機能できるような体制が整った。

人材育成 スポーツの研究分野で不足している女性のプログラム参加を推進し、現在博士課程学生の30%強を占めるまでになっている。社会人大学院生も17%である。さらに海外からの留学生受け入れを積極的に進め、現在17%に達している。カリキュラムでは基礎科目・専門特論科目を系統的に学ばせ、さらに優秀な学生は海外へ派遣し、国際的に活躍できる経験を積ませること、また英語のみで学位を取得できる制度を整えた。さらに本学博士キャリアセンターや企業などと協力してキャリアパスを提示している。以上のような取組が功を奏して、GCOE採択後博士課程学生数が大幅に増加した。

研究活動 3つのプロジェクトでは以下のような研究が進行中である。**プロジェクトⅠ：**小中学生の体力、身体組成、生活習慣についての実態調査を実施し、因子分析を多面的に行うことにより、子どもの体力に及ぼす要因を包括的に検討することを目指している。既存のフィールドのみならず、新たに開拓したいいくつかのフィールドで数千人規模での調査を開始した。**プロジェクトⅡ：**健康長寿の実現に向けて、身体活動による生活習慣病予防のエビデンスが蓄積されつつある。これを基に保健指導法の開発、および社会制度の策定を行っている。そのなかでも「行動変容」をどのように誘発するかをプロジェクト全体で取り組んでいる。**プロジェクトⅢ：**社会文化的財産としてのトップアスリートの育成プログラムを、野球・陸上競技などモデルとなる競技を中心に開発・実践している。また地域密着型プロスポーツの発展と地域イノベーションに関する解明を、主としてサッカー、野球をモデルに進めている。

海外連携 国際ネットワークの中心として**ケルン体育大学**と協定を結び、研究者、大学院生の交流を開始した。またアジア地域のスポーツ科学の教育・研究拠点として6大学(**北京体育大学、清華大学、上海体育学院、吉林大学、ソウル大学、台湾師範大学**)、さらに**カルガリー大学**(カナダ)、**ラフバラ大学**(イギリス)と大学箇所間交流協定を結び交流関係を確立した。外国人の優秀な人材を短期客員教員として招へいし教育・研究に大きな力となっている。また国際交流・研究協力の契機として年2回国際シンポジウムを開催している。以上のような取り組みの結果、主としてアジアの協定大学を中心に留学生の希望者が増加し、グローバルCOEプログラム開始前年には博士課程入学者の19名中1名であった留学生が、平成23年度は36名中12名に増加した。

(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、拠点活動に向けた教育研究組織の改編、施設・スペースの整備、博士課程学生・留学生への奨学金制度等が推進されており、評価できる。

拠点形成全体については、運営マネジメント体制の組織化、国際競争力を高めるための海外協定校との提携強化、国際シンポジウムの開催、研究者交流等が、緻密に立案された計画のもとに推進されており、評価できる。ただし、教員・大学院学生の国際協力・交流の実態は、なお不十分であり今後の更なる展開が求められる。

人材育成面については、各教育プログラム間の関係、研究プロジェクトとの関連、博士号取得に至るスケジュール等が明確に示され、大学院学生への経済支援やキャリアパス支援、女性支援等も含め、若手研究者が目的に向けて能力を発揮する仕組みが工夫されている。また国際化に向けた各種取組みも学生のレベルに応じた実効性のあるものであり、博士課程学生数・留学生数の増加、研究発表件数の増加に繋がっていると評価できる。今後は更に若手研究者の国際交流実績の拡大が期待される。

研究活動面については、連携大学の拡大により、事業推進担当者を中心に国際的な研究が開始されているが、海外に向けた独創的な発信についてはなお不十分であり、外部資金の獲得もやや少ないなど、更なる努力が求められる。また、子ども、中高年、トップアスリートを対象とする3つの戦略的プロジェクトについては、社会的ニーズも高く、相応の成果をあげているように見受けられるが、今後は、拠点の最終目的である3領域を貫く原理の探求と、融合学問領域の確立に向けてのより具体的な成果の発信が求められる。

今後の展望については、人材育成面で現行の努力を継続するとともに、国際活動については、留学や国際共同研究の推進等、更なる充実のための工夫が求められる。研究面については、3つの戦略的プロジェクトの更なる推進と、新たな融合学問領域「アクティブ・ライフを創出するスポーツ科学」の確立、さらに、健康を増進するスポーツ科学という視点からは、医学領域との共同研究・教育の推進も必要と考えられる。